

西風が吹いた次の日の朝は特に大きく美しく見えます。そんな日、車で相模湾沿いを走ると、道路が岬に出た瞬間、いきなり目の前に大きな富士が現れます。理屈抜きに驚きと感動です。

それに引き換え、ある夏、遠路来た人が富士山に行きたいと言ったので、五合目あたりまで行きたか、車で案内したことがあります。決してきれいとは言えない山の地肌が出て、遠くから見て感動していた富士に失望させられました。美しさでなく見苦しさを覚えました。富士山は富士山に行つて見るものではない、遠くから眺めるものだと悟られました。

女性に失礼な言葉ですが、夜目遠目笠の内と言う言葉があります。美人も適度な間を置いて眺めて美人だということでしょうか。富士山を足で踏んづけて、富士山礼賛とはどう言う神経か、と殺到する富士登山へ疑問をもたせる前田さんの一語一文でした。

注) 安曇族研究会

二〇一二年八月「古代海人の活動に焦点を当てた調査研究」を主旨に創建

事務局・千三八一―二四三 長野市稲里一―五―一 北沢ビル一階 龍鳳書房内

http://adumizoku.naganoblog.jp/ 会誌「古代海人族研究」発行 創刊号(二〇一三年八月)

この創刊号に私は「奴国王は安曇族」の題で寄稿しました。

なお、九月一日の安曇族研究会全

す。その狗古智卑狗の末裔が菊池氏で、現在・その本貫の熊本菊池市より岩手県が最多居住地域となっており、熊襲の多くも東北に逃れたことを知る。そこにある遠野の伝承を拾ったのが柳田國男の『遠野物語』で、そこに「心の故郷」を我々は見えてきた。大和の淵源は畿内大和ではなく九州の原大和としての倭(やまと)に始まり、倭がヤマトと訓む理由は、そこに集団稲作地を拓いた「呉の太伯の後」に率いられた倭人の功績による。倭や委は稲穂でたわんだ姿を写すもので、委奴国が狗国(犬国)を踏まえてあるのは、呉の故郷・江南では犬が尾に稲穂をつけ持ち帰ったことによるとする犬祖伝承をシェア族は今に伝える。その稲作民である南船系倭人が「呉の太伯の後」を奉じ、菊池氏に率いられて肥後に入植し、その一派が九州の原大和を拓いたことに、倭(やまと)や倭国の謂われが生まれたことが忘れられている。その菊池氏の多くが東北に流れた以上、倭人の心が遠野を染めたのは当然で、日本人が心の故郷をそこに感じるのには当然であった。これは皇統一元の畿内大和では一切、聞けぬ稲作伝承で、日本国は倭国を嫌い日本国と改号したのではなく、八世紀初頭に倭国を滅ぼしたことを隠したグラフト(接ぎ木)国家として日本国が成立したことによる。

谷川の列島探案が七二年の沖繩返還を前に沖繩訪問に始まったことは、大皇制祭祀の淵源を南島諸島に求めた吉本隆明と同様に注目されてよい。

国大会では、私と中島信文さんが話題提供者でしたが、中島さんは「露見せり『邪馬台国』(二〇一三年八月三十一日龍鳳書房発行)で邪馬台国の近畿説を痛烈に批判して、邪馬台国は、論理的に追求した結果、現在の八女市地方であるとしています。亀山 勝(鎌倉市在住 安曇族研究会顧問)

谷川健一追悼

室伏志畔(越境の会・主宰)

先日、考古学の森浩一の訃報を聞き、重ねて民俗学・地名学の谷川健一(一九二一―二〇一三)の訃報に接することになった。谷川は六三年創刊の『太陽』の初代編集長として鳴らし、その著作活動は六〇年代に始まるが、その著作の独自性が顕著になるのは、私の記憶では一九七九年の『青銅の神の足跡』や『鍛冶屋の母』を上梓したあたりからで、八年の『白鳥伝説』までが一つの稜線を形成する。それは戦後批評から歴史批評への転換点にあった私にとつてそう、地名学や民俗学からする人には別のピークがある。その多方面に渡る谷川の研究は、専門化する学界とはちがう在野精神に溢れる励みの書としてあつた。歴史は事実の積み重ねとしてあるが、それを動かすのは常に幻想であることを谷川は深く理解していた。

八世紀初頭の記紀による畿内大和それは柳田が黒潮本流の『海上の道』に稲をもたらした日本人の源流を求めたのを遡行するに等しい。それは日本人の母系社会の古層に届く流れとしてある。

問題は列島王権の源流は遙かに新しく、日本人の源流とちがいがいその黒潮本流からの分流・対馬海流に乗り、王権を越(高志)や出雲や北九州に運び胎動させた。その黒潮分流としての「対馬海流の道」は、また柳田の古層の「稲の道」とはちがう「集団稲作の道」であつた。それは前五世紀から前四世紀の春秋・戦国時代に国破れた呉越同舟した南船系倭人を、韓半島や列島に運び、北九州を中心に集団稲作が前三世紀を境に全国的に爆発的盛行する背景である。

この南船系倭人の稲作国家への侵攻・篡奪が、記紀の記す須佐之男命(スサノオ)の八岐大蛇(やまたのおろち)退治であり、大國主命の国譲り事件であり、ニギノ天孫降臨による委奴国侵攻であり、神武東征にほかならない。記紀は北馬系王権の史書として南船系王朝を偽朝として排したのは、中国二十四史に倣うもので、その侵攻・篡奪を記載するが、南船系王朝はカットされているため委奴国や邪馬壹国を見ないのだ。この出雲での八岐大蛇退治と国譲りによって生み出されたのが「青銅の神の足跡」であり、神武東征によって倭(やまと)を追われたニギハヤヒ系物部氏の足跡が「白鳥伝説」に

はかならない。しかし、谷川健一の探究は柳田の

での皇統一元史観の成立は、皇統に先立つ王権幻想を含めた一切の歴史幻想の払拭であつた。それに對し、地方の民俗を掘り起こした柳田民俗学の近代における成立は、搦め手からの天皇制批判の一面をもつ。それは雨について柳田國男は「京都の時の雨はなるほど宵曉ばかりに、物の三分か四分ほどの間、何度と無く繰り返してきつと通り過ぎる。東国の平野ならば霰か雹かと思ふやうな、大きな音を立て、降る」と、同価値をもつものとして並立させたことは、鄙文化をもつて京文化を相対化する試みと見ることが出来る。

谷川健一の業績は、官僚として天皇制に癒着する柳田の一面と別にあつた、この柳田の反体制的側面を、鄙の民俗や地名に託した研究に見えてくる。初期作品の『魔の系譜』のタイトルが象徴するように、その探索はこの日本国での負の遺産の救済と継承にあつたかに見える。「鬼は外」と排除された者に、青銅の神を担う人々や白鳥伝説を担った物部氏が重なる。その谷川の故郷が熊本県水俣市であつたことは、熊本が朝敵・熊襲の発祥地で、現代日本のマイナス・イメージを形成した公害病の地であつたことは、彼の負の情念をかき立てた。

その谷川兄弟は集まると連歌を編む風流をもつた。この高い教養は何処から来るのかと、私は「熊襲の公達」を自負した弟・谷川雁を思い、熊襲が倭王を生んだ「呉の太伯の後」の貴種の血の流れに重なるかと疑つ

た。黒潮本流に日本人の源流を見たが、その分流の対馬海流に乗った列島王権の胎動を見なかつた。そのため、物部氏の淵源を遠賀川周辺としならその天神降臨地を畿内大和とし、神武に追われたニギハヤヒ旧皇統の逃亡地に畿内の物部氏があるのを見ず、結果として記紀皇統一元史観を首肯し、出雲王朝や九州王朝を見逃してきた。

しかし、それは言わずもがなの批判で、谷川の『青銅の神の足跡』や『鍛冶屋の母』それに続く『白鳥伝説』は、世界文明史を一変させた長江文明や、列島王権史を転換させる出雲での神庭荒神谷遺跡からの三五八本の銅矛(銅剣でない)及び、加茂岩倉遺跡からの三十九個の銅鐸の発見前夜の天皇制前史に迫る瞳目すべき仕事としてあつたことを忘れるべきではない。これらその後の新発見を踏まえ私の研究があることを思うと、谷川健一の先駆的業績はそれ以後の発見を接ぎ穂として見直すとき、新たなパラダイムを拓く原石としての価値を今も失われないものとして燦然と輝く。

古事記の国生み神話に玄界灘の島々を見た! (下)

アマチュア古代史研究者

湊能基呂太郎(おのころたろう)

(7) 隠岐(おき)之三子島、天之忍許呂別(あまのおしころわけ)沖ノ島

隠岐は「還り坐す」ときに産んだと

たことがある。町医者を営む谷川家は水俣市にあつたが、海を挟んだ対岸の天草に吉本隆明の父がかつて舟大工を営んだことを知って、この両家の出自に興味を持ち、その姓氏分布を全国比較したことがある。それは驚くほど重なるが、朝敵・熊襲として追われた南九州で両家は重なるが、朝敵・熊襲の追放地・陸奥に谷川氏を見ても吉本氏は見当たらない。これを踏まえ、私は吉本隆明を南船系海人族の流れとし、谷川氏を熊襲に合流した饒速日命(ニギハヤヒ)系物部氏の流れとしてきた。

朝敵・熊襲が皇統に先在した九州王朝・倭国の金印国家・委奴(イヌ)蝦夷は神武東征に先在し、原大和の倭(やまと)に天神降臨したニギハヤヒ系旧皇統で、共に正統皇統を主張したことに朝敵の汚名を帰せられた理由がある。それは偽書として排除されている『東日流(つがる)外三郡誌』の主張に重なる。熊本県下の神社を訪れると皇統に先在した出雲王朝や九州王朝の神々がこの熊襲の地で蟠集する。その意味は新興の記紀皇統に先立つ王統及び旧皇統が、新興の記紀皇統勢力の掃討にあつて、最後の抵抗拠点として熊襲の地があつたことを知る。それにも敗れ、熊襲が更なる南九州に落ち伸びたように、旧皇統の多くは蝦夷として東北に新天地を求めた。

「魏志倭人伝」は委奴(狗)国同族の狗奴国の官を狗古智卑狗と記し、邪馬壹国(邪馬台国)に属さずと記

は書いていないが、玄界灘を制圧したのなら、沖ノ島も制圧したのではないだろうか。沖ノ島は宗像大社が代々沖津宮を鎮座し、祭祀を十数世紀にわたって執り行ってきた島であり、古代天皇制が最も神聖視したアジマサ(ピロウ)が採れる島である。

また、この島にも亦の名に「別」が入っている。つまり吉備氏の軍が相島と沖ノ島を制圧したとも考えられる。天之忍男(近衛軍)の別働隊が制圧したとも考えられるのだ。どちらで考えても、距離的には大差はない。大陸への交通の要所として、ぜひ手に入れたかったに違いない。

ただし、一つ問題がある。それは、「三小島」という表現である。沖ノ島はそばの小屋島を含めて二島のみである。そばに岩礁もあるので、三小島ともいえないが少々強引な気はする。島根県の隠岐諸島は大小様々な島で構成されているが、大まかに島前三島と島後といわれる本島の、あわせて四島で構成されている。島前の三島だけをイザナミ神は産んだと考へても、隠岐の主役はどう見ても島後の本島である。やっぱり矛盾している。

私の推理はこうだ。元々の伝承は、「沖ノ二子島」であつたのだが、古事記編者がこれを「隠岐ノ二子島」と勘違いし、さらに隠岐には小島は三島あるので伝承が間違えたと思ひ込み「二」を「三」に書き直したのではないか。もしくは、沖ノ島を特定させないために、意図的な改ざんを行ったのかももしれない。後者であれば、そもそも